

柳田国男のエスペラント実験

Kunio Yamagita as an Esperantist in the Early Part of the 20th Century

橋 弘 文*

TACHIBANA Hirofumi

This paper is a case study on Japanese Esperantists selecting Kunio Yanagita (1875-1962) as an example. He is well known for his study on the manner of living of ordinary Japanese and their world view during the early part of the 20th century, when their life was in the process of transition from pre-modern to modern. He was interested especially in traditional aspects of their way of life. At the same time, he became an Esperantist. In 1923, he attended an international convention of Esperantists for commerce held in Venice and enjoyed a conversation with Esperantists from European countries.

キーワード：柳田国男 (Kunio Yanagita), 民俗学 (folklore), エスペラント (Esperanto), 実験 (experience)

1 はじめに

柳田国男は「実験」ということばにできる限りの意味をこめる。「実験」は一般には、つぎのように説明される (松村 1988)。

- ①実際に試み、考え方の正否を調べること。特に自然科学で、特定の現象や関係を研究するため、人工的な一定の条件を設定し現象を起こさせて、観察し測定すること。仮説や理論を検証し、新しい現象を探し出すために行われる。
- ②実際の経験。

柳田国男が民俗学を構想した 20 世紀前期の日本においては、急激な新文化は、まだ人びとの生活全般には浸潤していなかった。前近代の生活の分子は潜んでいて、ときあって頭を出すことがあった。柳田は近代生活における前近代の生活体験を「実験」とよび、それらの「実験」を比較検討する学問を計画した (「郷土研究と郷土

教育)。

柳田国男は「幻覚の実験」で、幼少期の不思議な体験を「実験」例として提示している。たとえ不思議な現象の体験であっても、前近代と近代のはざまに生きていた柳田にとって、それらは重要な「実験」だった (「幻覚の実験」)。

近代の人間文化は、「実験」の比較研究という科学的な方法によって明らかにされる、と柳田は考えた (柄谷 2013)。

伊藤幹治の『柳田国男と梅棹忠夫 自前の学問を求めて』(伊藤 2011)でも指摘されているように、柳田国男はエスペランティストだった。そしていうまでもなく民俗学者でもあった。柳田国男がめざした民俗学とザメンホフが創案したエスペラントのあいだには興味深い反響がみられる。

民俗学は、政治的・経済的な支配者層ではなく、ふつうの人びとの生活や世界観を研究対象にする。エスペラントは、一部の知識エリートの言語ではなく、ふつうの人びとが使用できる言語として考案された。

柳田国男は学問のための学問をめざしたのではなく、

*大阪観光大学観光学部

ふつうの人びとの幸福を願って、民俗学をつくりあげていった。ザメンホフもまた外交官や学者のための言語ではなく、言語を異にするふつうの人びとの幸福のためにエスペラントをつくった。

だが、民俗学は学問で、エスペラントは言語、という基本的なちがいがあある。また、柳田の民俗学が生活の考察と幸福の探求のために現代から過去に向かうのにたいして、エスペラントは国際共通語で人びとが理解しあうことができる未来をのぞんでいる。

民俗学者としての柳田国男は、過去から近代を問い、いっぽう、エスペランティストの柳田は、近代以降の社会を構想していた。

21世紀の現代からみると、柳田国男のエスペラント学習と実践は、一つの「実験」ととらえることができる。20世紀初期、エスペラント運動にかかわった多くの人びとの生活を究明するための予備的な段階として、この稿では柳田国男のエスペラント実験を概観する。

2 柳田国男がエスペランティストになるまで

1859年にビャウイストク (Białystok) でラザル・ルドヴィク・ザメンホフはユダヤ人の両親のあいだに誕生した。当時ビャウイストクはロシア帝国の支配下にあった(現在は、ポーランド領)。ビャウイストクは、ロシア政府がユダヤ人の管理のために制定した「ユダヤ人特別強制居住区(居住境界)」の一都市だった。ユダヤ人は「居住境界」以外に住むことは許されなかった(シェインドリッ 2012)。1860年から70年ころのビャウイストクの人口、約3万人のうち、60%がユダヤ人、17%がドイツ人、13%がロシア人、10%がポーランド人で、それぞれちがったことばを話していた(小林 2005)。

ザメンホフは、1885年にモスクワ大学卒業後、いったんは内科医となるが、すぐに眼科医を志し、ウィーン大学病院で研修を受けた後、1886年にワルシャワで眼科医を開業した。1887年7月14日、ザメンホフは婚約者クララの父の経済的な援助を得て、ロシア語によるエスペラントの『第一書』を自費出版した。『第一書』は、「まえがき」「アルファベット」「文法 16カ条」「文例」「918単語の辞書」からなり、表紙の裏には「この言葉の作者はこの国際語に対するすべての私有権を永久に放棄する」「誰でもこのパンフレットを各国語に翻訳してよい」と記されていた(小林 2005)。

エスペラントは、じわじわと共鳴者を増やしていっ

た。1887年中に『第一書』のポーランド語版、フランス語版、そしてドイツ語版が発行され、1888年に英語版の『第一書』が刊行された。1889年、ドイツのニュルンベルグで、最初のエスペラント雑誌『La Esperantisto』が創刊された。1898年、ルイ・ドゥ・ボーフロンがパリに「エスペラント普及会」を設立した。1905年に、フランスのブローニュ・シュル・メールで第一回世界エスペラント大会が開催された。そしてエスペラントは20世紀の初期には日本にも伝わった。

イアン・ラプリーは、エスペラントが日本に伝来した三つのルートを描いている(Rapley 2013)。一つは、フランス・ルート。1902年に長崎海星中学の理科教師だったフランス人のA・ミスレルが、『The Nagasaki Press』にエスペラントについての記事を寄稿した。ミスレルの兄、ジャンはザメンホフと親交のあるエスペランティストだった。ミスレルもザメンホフに勧誘されてエスペラントを学習しはじめた。気鋭の古文書学者だった黒板勝美が『The Nagasaki Press』のミスレルの記事を読んで強い興味をもち、エスペラント学習書を取り寄せ、エスペラントを学びだした。

1906年、黒板勝美は安孫子貞次郎(有楽社支配人)と薄井秀一(読売新聞記者)とともに発起人となり、「日本エスペラント協会」を設立した。黒板勝美は、1908年2月から10年にかけて、ヨーロッパの古文書館の視察のために、ヨーロッパに出張した。1908年9月にドイツのドレスデンで開催された第4回世界エスペラント大会に、黒板は「日本エスペラント協会」を代表して出席した。日本政府は、ドイツ留学中の新村出をその大会に政府代表として派遣した。新村はドレスデンに向かう車中でエスペラントをマスターしたという。

1910年に、内閣記録課長として柳田国男は内閣文庫の整理をまかされていたが、そのおり、内閣文庫蔵の『続群書類従』を借りていた黒板勝美とのやりとりを書きとめている(「退読書歴」)。また、柳田は皇居の乾門の二階の蔵書を新村出といっしょに調べたことを語っている(『故郷七十年』)。柳田国男は、黒板勝美や新村出という日本を代表するエスペランティストと知り合いだったが、かれらの影響を受けてエスペラントを学ぶことはなかった。

エスペラントの日本伝来の二つ目のルートは、E・G・ガントレットによるイギリス・ルート。ウェールズ出身のE・G・ガントレットは岡山の第六高等学校で英語とラテン語を教えていた。1903年、ガントレットは友人で金沢第四高等学校の英語教師だったG・H・マッケ

ンジーを介してエスペラントについて知り、エスペラントを熱心に勉強しはじめた。

エスペラントをマスターしたガントレットは、75 カ国のエスペランティストと文通した。1905 年、ガントレットは妻の恒子の協力を得て、自宅でエスペラントの講習会をはじめた。ガントレットはエスペラントの通信教授もおこなった。受講者は 677 名にのぼった。さらにガントレットは印刷所研精堂の村本達三をエスペラントの世界に引き入れ、1906 年 3 月に日本で最初のエスペラント辞典となる『A Short Vocabulary, English-Esperanto and Esperanto-English』を発行した (岡 1983)。

エスペラントの日本伝来の三つ目のルートはロシア・ルート。1902 年、二葉亭四迷はロシアのウラジオストクを訪れ、ウラジオストクの有力者であり、同地のエスペラント協会の会頭でもある F・ポストニコフと知己になり、二葉亭じしんもウラジオストクのエスペラント協会に入会した。ポストニコフは 1891 年にペテルブルグでザメンホフに出会ったことがきっかけで熱心なエスペランティストになった (ヨコタ村上 2014)。

ポストニコフは、1903 年 3 月、東京の二葉亭の家を訪ね、ロシア語版のエスペラント教本の日本語訳を刊行することを懇願し、当時としては大金の 50 ドルを二葉亭に渡した。1906 年 7 月、二葉亭はロシア語のエスペラント教本の日本語訳『世界語』を東京の彩雲閣から出版した。『世界語』はベストセラーになった。二葉亭はつづけてザメンホフのエスペラント・リーダー『世界語読本』を出版した (なだいなだ・小林司 1992)。二葉亭の『世界語』によってエスペラントにみちびかれた人も多い。「日本のエスペラント運動の父」と称される小坂狷二も『世界語』からエスペラントを学びはじめた一人だった。

柳田国男は二葉亭の『浮雲』などの作品を読んでいた。したがって、ベストセラーとなった二葉亭の『世界語』の発行について、柳田が知らなかったはずがない。

フランス・ルート、イギリス・ルート、そしてロシア・ルートを経て日本に伝来したエスペラントは、1906 年 6 月に「日本エスペラント協会」設立へと合流した。同年の 8 月には協会機関誌『日本エスペラント (La Japana Esperantisto)』が創刊され、9 月に東京で「日本エスペラント協会第 1 回大会」が開催された。

エスペラントは日露戦争 (1904-05) 前後の日本に伝来した。日露戦争時、柳田国男は横須賀の捕獲審検所に勤めていた。捕獲審検所は戦時下に捕獲した外国船舶の

裁判所にあたる。外国船の積載物の目録を作成するためには、フランス語などの外国語の知識が要求された。英独仏などの外国語を読むことは、柳田にとってさほど苦ではなかった。

日本においてエスペラントの組織が創立され、その機関誌が創刊されたころ (1906)、柳田国男は視察のために樺太を訪れていた。「日本エスペラント協会第 1 回大会」が東京で開催された 1906 年 9 月 28 日、柳田は樺太の科尔サコフに滞在していた。

1908 年になると日本のエスペラント運動は停滞する。日本エスペラント協会の会員数は減少し、大会も開催されず、機関誌の発行もおくれがちになる。1908 年 5 月下旬から約 3 ヶ月間、柳田国男は九州と四国を旅行した。1909 年 5 月から 7 月にかけて柳田は木曾、美濃、飛騨、北陸地方を旅行した。1908 年ごろに柳田はじしんの旅行の見聞を語る「郷土研究会」を自宅で開いた。1910 年に、この「郷土研究会」が「郷土会」に発展する。「郷土会」は、地方の科学的研究を目的としたクラブであり、新渡戸稲造が世話人、柳田国男が幹事となり、新渡戸邸で開催された。「郷土会」は年に数回ひらかれ、1919 年まで継続した。「郷土会」によって、柳田国男と新渡戸稲造の関係は強まった (佐谷 2015)。

1914 年 7 月 28 日、オーストリア=ハンガリー二重帝国がセルビアに宣戦布告した。ヨーロッパ諸国は援助条項をふくむ同盟条約を結んでいたために、オーストリア=ハンガリー二重帝国とセルビアとの戦争は、ヨーロッパの国々を巻き込み、戦場はヨーロッパ諸国の植民地にも及び、第一次世界大戦に発展した。ドイツ、オーストリア=ハンガリー二重帝国、トルコの国々が、イギリス、イタリア、ロシア、フランス、日本、アメリカと戦争した。

1918 年 11 月にドイツが降伏し、第一次世界大戦は終結した。1919 年 1 月に、敗戦国側のドイツ、オーストリア=ハンガリー二重帝国、トルコの領土や賠償金などを討議するために、パリ講和会議が開催された。パリ講和会議は戦勝国側のイギリス、アメリカ、フランス、イタリア、日本からなる五大国会議によって主導された。五大国会議では、ドイツなどの植民地の領有について議論され、旧植民地の委任統治と受任国が決められた。ドイツの旧植民地のうち、南西アフリカは南アフリカに、ニューギニアはオーストラリアに、サモア諸島はニュージーランドに、そして南洋諸島は日本に、それぞれ委任統治領として配分された。

パリ講和会議で国際連盟の設立が議論され、連盟規約

検討委員会によって国際連盟規約が起草された。パリ講和会議で連盟規約が採択された。

国際連盟の本部はジュネーブに置くことが規約で定められた。委任統治を監督するために、国際連盟に委任統治委員会が設けられた(篠原 2010)。国際連盟の初代の事務総長には、イギリス外交官の E・ドラモンドが就任した。国際連盟の初代の事務次長に新渡戸稲造が就任した。そして委任統治委員会の日本代表の委員として柳田国男が就任した。新渡戸が柳田を委任統治委員会委員に推挙したとみられている。

3 柳田国男がエスペ란ティストになる

1921年7月11日、柳田国男はジュネーブに到着した。ジュネーブには、1908年に創立された「Universala Esperanto-Asocio (世界エスペラント協会=UEA)」の本部が置かれていた。UEAの副会長の E・ブリヴァは国際連盟事務局の通訳室で働いていた。また、国際連盟事務局にはエスペ란ティストの藤沢親雄が新渡戸のもとで働いていた。そしてジュネーブでは「ラ・ステロ (La Stelo)」というエスペラントの協会が活動していた。

新渡戸稲造は、1921年7月31日から8月6日にかけてプラハで開催された第13回世界エスペラント大会に、国際連盟代表として出席した。新渡戸はエスペラントを支持していた。

柳田国男とエスペラントの出会いは、奈良宏志(奈良 1974)、岡村民夫(岡村 2013)、そして佐谷眞木人(佐谷 2015)らの研究によって明らかにされている。

柳田が佐々木喜善に送った手紙の文面から、柳田がエスペラント学習を決意した日付は、1921年度の委任統治委員会が終了間近の、1921年9月ごろだと推測されている。

ジュネーブ滞在中の柳田をとりまいていたエスペラントの熱気に柳田が接触したことが、柳田がエスペラント学習を決意したきっかけになったとみられている。そして、委任統治委員会という国際会議の場において、闊達に議論できるようなフランス語や英語の語学力を柳田がもっていないとあらためて自覚したことも、柳田をエスペラントに導く要因になったとみられている。

柳田国男のエスペラントとの出会いは、日本語を母語とする人がエスペラントに出会うあり方からみる場合、いくつかの特色がある。まず、第一に、柳田はジュネーブという海外でエスペラント学習を決意している。日本

に暮らす人びとの多くは、日本国内でエスペラントに出会った。エスペラントをひととおり学習すると、人びとは海外のエスペ란ティストと文通した。日本国内に住む日本語を母語としない人びとは少数だったから。しかし、柳田は文通する必要はなかった。柳田はジュネーブに滞在しているあいだに、エスペラントの会話を実践することができた。

柳田国男のエスペラントの出会いの第二の特色は、エスペラント学習の最初からエスペラントの普及を念頭に置いていた点にある。個人的なコミュニケーションの拡大でなく、集団規模によるコミュニケーションの革新的な展開を柳田は期待した。

柳田国男のエスペラントの出会いの第三の特色は、ふつうの人びとがエスペラントを習得し、個人的な問題だけでなく、国家間にかかわる問題についてエスペラントで議論できる社会を夢想したところにある。

柳田国男が佐々木喜善に宛てた絵葉書(1921年9月18日付け)の文面は、柳田とエスペラントの出会いに関連して、しばしば引用されるが、「エスペラントの運動を起こすの必要あるかと存申候」(「書簡」)という柳田のことは検討する必要があるだろう。

一時期、停滞していた日本のエスペラント運動は、1916年ごろから再び活発になる。日本エスペラント協会の会員数も増加をはじめ、協会の機関誌も定期的に発行され、そして横浜、横須賀、広島、金沢、台湾、十日町、堺、大阪などの協会支部でのエスペラント普及活動もさかんになってゆく。

ロシアのエスペ란ティスト、ワシーリー・エロシェンコの訪日(1914年~1920年)は、日本のエスペラント運動に刺激をあたえた(高杉 1982)。盲目のエロシェンコは、エスペ란ティストの中村精男のはからいで、東京盲学校の特別研究生となって通学した。東京盲学校師範科の学生だった鳥居篤治郎は、エロシェンコに出会い、日本で最初の盲人エスペ란ティストになった。劇作家の秋田雨雀もエロシェンコに、偶然、公園で出会ったことがきっかけでエスペラント学習をはじめた。1916年4月に東京で開催された第3回日本エスペラント大会において、エロシェンコは「今が種をまく時」という題で講演し、ロシア民謡を独唱した。

バハイ教の布教師、アグネス・アレキサンダーが1914年11月に来日した。バハイ教の大教育者、バハオラの「世界のすべての人びとが、世界共通語と共通文字を採用する時が近づいている。これが達成できればどこへ旅行しても自分の故郷に行くように思えるだろう」

という教えに基づき、バハイ教はエスペラントを支持した。アレキサンダーもエスペランティストだった。アレキサンダーは、来日後、エロシエンコ、秋田雨雀、鳥居篤治郎などのエスペランティストと積極的に交流した。鳥居はアレキサンダーとの出会いによって、バハイになった (バハイ出版局編集部 1992)。

1919 年 12 月、日本エスペラント協会は日本エスペラント学会に発展した。1920 年 1 月、日本エスペラント学会の機関誌『La Revuo Orienta』が創刊された。

1920 年 2 月、フィンランドの初代駐日公使、グスタフ・ヨン・ラムステットが来日した。ラムステットは言語学者だったが、エスペランティストでもあった。日本のエスペランティストたちは着任まもなくのラムステットと接触し、2 月 26 日にはエスペランティストたちによるラムステットの歓迎晩餐会が開催された。ラムステットはエスペラントで講演もおこなった。そのさい、何盛三や栗飯原晋らがエスペラントから日本語に通訳した (ラムステット 1987)。

柳田国男が佐々木喜善にむかって「エスペラントの運動を起こすの必要あるかと存申候」と書き送ったころ、日本のエスペラント運動は輝きを放っていたといえるだろう。つまり、わざわざ「起こすの必要」はなかった。柳田のこのハガキは「秋田君とでも相談し君も是非書るやうになり置かれんことをのぞみ申候」とつづく。柳田が秋田雨雀のエスペランティストとしての活動を知っていたことから、柳田は日本のエスペラント運動が活発に展開しているようすを、ある程度知っていたと思われる。

「エスペラントの運動を起こすの必要あるかと存申候」という文は、佐々木喜善にエスペラント学習をうながすレトリックと受けとめるべきだろう。佐々木喜善は、柳田のことに反応し、秋田雨雀にも手紙を出し、エスペラントの学習をはじめた。秋田雨雀は青森県黒石市出身で早稲田大学卒の作家。東北地方出身、早稲田大学、文筆家という共通項からか、おそくとも 1908 年ごろから佐々木喜善と秋田雨雀のあいだには交流があった。柳田国男と秋田雨雀は、1907 年前後に、「イプセン会」で知り合ったと思われる。

1921 年にジュネーブから日本に一時帰国した柳田国男は、エスペラント関係者と積極的に会合をもつ。1922 年 1 月末ごろ、柳田はエスペラントを学習し始める。そして日本からジュネーブへの旅中、すでにエスペラントを原文で読むことができるまで上達した。

ジュネーブにもどった柳田国男は、ジュネーブのエス

ペラント協会の「ラ・ステロ」とかかわり、1922 年 10 月 27 日には、柳田が滞在していた家を「ラ・ステロ」の会合場所として提供し、柳田じしんも沖縄について話した。柳田は 11 月 23 日、12 月 1 日、12 月 16 日に開催された「ラ・ステロ」の会合に参加した。柳田は 1922 年 11 月からエスペラントの個人レッスンを受ける。先生はオデッサから亡命してきたウマンスキーという女性だった。

日本国内でエスペラントを学習する人びととくらべると、ジュネーブの柳田国男の環境は、エスペラント学習にとって、たいへん恵まれた環境だったといえる。もちろん、そうした環境は、柳田のエスペラントへの情熱があったからこそ、形成された。

柳田国男のエスペラントへの情熱は、1923 年 4 月 2 日から 5 日にかけて、ヴェネツィアで開催された「商業共通語に関する国際商業遊覧業会議 (INTERNACIA KOMERCA KAJ TURISTA KONFERENCO Pri komuna komera lingvo)」への参加でピークになる。『LA REVUO ORIENTA』1924 年 2 月号 (日本エスペラント学会財団法人組織五十周年記念行事委員会 記念図書刊行部会編『EL LA REVUO ORIENTA (JEI 50 年の歩み) 第 1 巻』日本エスペラント学会 1976.) の「緑星旗の翻へるところ ★1923 年度エスペラント界の収穫★」は、この国際会議について、こう伝えている。

更に特筆すべきは四月二日より五日迄伊太利ヴエネツィア市に開かれた『商業共通語に関する国際商業遊覧業会議』で、参加国二十三、参加団体二百九、官庁八、商業会議所八十七、定期市二十一、遊覧業三十其他商工業会社学校まで討議は一切エスペラントで運ばれその整然敏速たる状は実に他の如何なる国際会議にても見ることの出来ぬ程であったのは当然で、この一事を以てしてもエスペラント採用が各国民に齎す利便の如何に大なるかは容易に想像し得られる。この結果益々実業界に於けるエスペラント採用の傾向は進むべく商業学校に於けるエスペラント教授は直ぐに大に弘めらるゝに到った。尚、この会議に於いては我日本エスペランティストとして柳田国男氏も尽力せられ、日本人が言語の束縛を離れた如何に働くかを欧米人の前に実証せられたことは我々日本人のエスペラント学習上意を強うするに足るところである。

このヴェネツィアの国際会議には 87 の商業会議所が参加している。商業会議所は商業の発展を目的として作

られた経済団体だったが、商業の範囲にとどまらない民衆の意見を反映する組織でもあった。1878年に日本で商業会議所の前身となる東京商法会議所が設立された。渋沢栄一は、東京商法会議所創設の経緯について、こう語ったという（永田 1967）。

……何故斯くも至急に商法会議所の設立が必要になったかと云ふに、条約改正に当って、我国当局者が彼の英公使パークスに交渉して『輿論が許さないから改正されたい』と云った処『日本に輿論があるか、商人が申立てると云うけれども、何によって云はれるのか、日本には多数の集合協議する仕組がないではないか、個々銘々の違った申出では輿論ではない』との意味で却って反駁して来た。……其処で条約改正に輿論が必要である。輿論を作る場所を形式的に作ろうとし、茲に商法会議所の創設となったのであった。

柳田国男は、かつて農商務省の官僚だった。柳田は産業組合についても造詣が深かった。商業会議所が「輿論」=世論の形成の場でもあるということは、当然、柳田は知っていたにちがいない。世界の商業会議所が集う会議は、世論の交換の場にもなりうる。ヴェネツィアの国際会議の数ヶ月前、1922年12月7日に、柳田は、「日本の商業会議所へ、ベネチアのエスペラント会議の案内状を取次ぐ」ことをおこなっている（「瑞西日記」）。それでは、ヴェネツィアの国際会議に参加した柳田国男は、何を感じたのか。1923年6月16日、ジュネーブから柳田はヴェネツィアで撮られた写真に、つぎのような文章をそえて佐々木喜善に送った。

……四月の四日にヴェネチアでうつしました、場所は世界でも尤もうつくしいサンマルコ大寺の門前で仲間皆エスペランティストです 右の大きいのがチェコスロバキアの人口マダ他の二青年はハンガリヤ人、二人の姉妹は此町の娘です、エスペラント大會の特志案内役でした 今になっては夢のやうな記念です（「書簡」）

柳田国男にとって、ふつうの人びとがエスペラントで議論したヴェネツィアの国際会議は、「夢のやうな記念」となった。

4 柳田国男とエスペラントの人びと

1923年9月2日、ロンドン滞在中に柳田国男は関東大震災について知る。柳田はジュネーブにもどらず、帰国の途についた。1923年11月8日に柳田は横浜に到着した。

帰国後、柳田国男はエスペラントの講演などでエスペラント運動にかかわってゆく。柳田は、1924年2月23日に大阪の学生エスペラント会で講演し、5月には京都のエスペラント講演会に出席し、6月12日に東京女子高等師範学校の国際教育講習会でエスペラントの話しをした（「年譜」）。柳田は内務省社会局でエスペラントの講演会をおこなった（初芝 1998）。

1925年11月7日に柳田国男は東京高等師範学校で開催されたエスペラントの会で講演した。このとき秋田雨雀も出席していた。秋田は柳田との再会を日記に、「柳田国男氏とはほとんど二十年ぶりであった。リベラリスト。むやみと考古学的になっている。」と書いている（尾崎編 1965）。

民俗学の研究に力を注ぐ柳田国男の言動が、秋田雨雀には「むやみと考古学的になっている」と感じられたのかもしれない。1923年12月22日に、柳田は自宅で民俗学の研究会を開催した。以降、ほぼ毎月1回のペースで、この研究会は開催されてゆく。柳田は「南島談話会」、「北方文明研究会」、昔話研究の「吉右衛門会」、「方言研究会」で中心的な役割を果たしてゆく。1924年4月から1929年3月まで、柳田は慶應義塾大学文学部史学科で毎週1回、「民間伝承」を講義した。

1926年に、柳田国男は日本エスペラント学会の理事になる。いっぽう柳田が中心となっていた民俗学関連の研究会のメンバーの中には、エスペランティストがいた。沖縄学のパイオニア、伊波普猷は、1916年にエスペラント学習をはじめている。また、「大正十三年から昭和五年までのふるい日記を出してみると、いちばん度々出て来る名前は、琉球出身の比嘉春潮君であった」（『故郷七十年』）と後年、柳田に思い起こされている比嘉春潮は、1915年の夏からエスペラントを独習し、1917年の12月には沖縄県立図書館で伊波普猷とともにエスペラントの講習会を開いた。1923年に比嘉は上京し、柏木の自宅で中垣虎児郎や大島義夫らとともにエスペラントの研究会（「柏木ロンド」）をはじめた。比嘉たちは、「この研究会で、ソビエトやヨーロッパの諸国および中国の革命文学のいくつかをエス語で読むことが

できた」という(比嘉 1971)。

フィンランド初代駐日公使のグスタフ・ヨン・ラムステットが東京大学でフィンランドの民族文学について講演した。ラムステットは、この講演のなかで、フィンランドの方言研究にもふれ、さらに日本語の方言研究を厳密にするべきだと提案した。柳田国男はラムステットの講演に刺激をうけた。ラムステットは、こう書いている。

この講演で述べた提案の成果として、柳田教授という学者が、大学生のグループを助手にして、方言収集旅行を開始した。この研究着手は非常に迅速な収穫を見たのである。すでに私は離日前に、研究発表会に出席したが、そこで研究成果として「蟻」と「蜘蛛」という語と、その命名の日本全域における発生、伝播、混合について発表された。その折り、柳田教授はこうした研究に私が満足しているかを尋ねて、この研究会は私が以前東京大学で講演したときに提案した結果生まれたものだとして述べた(ラムステット 1987)。

ラムステットは、1891年にエスペラントを学習し、1908年にはヘルシンキ大学で「言語とエスペラント」という講義をおこなっている(柴田巖・後藤斉編 峰芳隆監修 2013)。

20世紀初期、柳田国男のまわりにはエスペランティストがいた。かれらの多くは、比嘉春潮のように社会主義への共感から、あるいはラムステットのように言語学的な関心でエスペラントにかかわっていた。柳田がエスペラント学習を決意したころには、ふつうの人びとがエスペラントで交流するという理想をもっていた。柳田は、エスペラントによるふつうの人びとどうしの交流が、多元的な情報をもたらし、選挙の判断規準になるだろうと期待していた。はたして、柳田のエスペラントへの理想は持続したのだろうか。

1933年9月29日、佐々木喜善が死去した。佐々木喜善は、柳田国男のすすめにより、エスペラント学習をはじめ、地元の岩手の新聞にエスペラントにかかわる文章を載せ、またエスペラントの講習会もおこなっていた。佐々木喜善は民俗学の研究とエスペラントをとおして花巻の宮沢賢治と交流していた(遠野市立博物館 2013)。宮沢賢治は佐々木喜善の死の8日前に亡くなっている。柳田国男は「郷土研究家としての佐々木喜善君」という談話(柳田 1933)で、佐々木喜善とエスペラントの関係について語っている。石井正己編の

『佐々木喜善追悼資料集成』(石井 2009)から引用する。

一般に東北の人はさうですが身体がとても大きく、容貌風采共に堂々として重々しく、口数も少ない癖に、ひどく感覚だけは近代的で神経の繊細な生活力の稀薄な人と、みかけは弱そうでゐて恐ろしく生活力の強烈な人とがありますが、佐々木君は実に前者の性格の典型的な人でした。人の笑って顧みない昔話の蒐集をやりながら、エスペラントの研究をやった佐々木君の一見矛盾に見える意図なり仕事なりは、よくその性格を現してゐるものでせう。恐らく佐々木君は、この矛盾で一生苦しんだのではあるまいかと思ひます。

佐々木喜善は民俗学研究とエスペラントの矛盾に苦しんでいた、と柳田国男は追想している。しかし、民俗学研究とエスペラント研究を矛盾としてとらえ、苦しんでいたのは、ほかならぬ柳田国男じしんではなかったかと思われる。

【付記】

脱稿後、後藤斉氏の『人物でたどるエスペラント文化史』(日本エスペラント協会 2015)の刊行を知りました。後藤氏は、エスペランティスト柳田国男の足跡を、エスペラントの資料をふくめて総合的に明らかにしています。

【参考文献】

- 石井正己編(2009)『佐々木喜善追悼資料集成』
 伊藤幹治(2011)『柳田国男と梅棹忠夫 自前の学問を求めて』岩波書店
 岡一太(1983)『岡山のエスペラント』日本文教出版
 岡村民夫(2013)『柳田国男のスイス 渡欧体験と一国民俗学』森話社
 尾崎宏次編(1965)『秋田雨雀日記 第1巻』未来社
 柄谷行人(2013)『柳田国男論』インスクリプト
 小林司(2005)『ザメンホフ 世界共通語を創ったユダヤ人医師の物語』原書房
 佐谷眞木人(2015)『民俗学・台湾・国際連盟 柳田国男と新渡戸稲造』講談社
 レイモンド・P・シェインドリン著 入江規夫訳(2012)『ユダヤ人の歴史』河出文庫
 篠原初枝(2010)『国際連盟 世界平和への夢と挫折』中公新書
 柴田巖・後藤斉編 峰芳隆監修(2013)『日本エスペラント運動人名事典』ひつじ書房
 高杉一郎(1982)『夜あけ前の歌』岩波書店
 遠野市立博物館(2013)『佐々木喜善と宮沢賢治』

- 永田正臣 (1967) 『明治期経済団体の研究』 日刊労働通信社
 なだいなだ・小林司 (1992) 『20世紀とは何だったのか マルクス・フロイト・ザメンホフ』 朝日選書
 奈良宏志 (1974) 「柳田国男とエスペラント」 『季刊 柳田国男研究』 第4号
 日本エスペラント学会財団法人組織五十周年記念行事委員会
 記念図書刊行部会編 (1976) 『EL LA REVUO ORIENTA (JEI 50年の歩み) 第1巻』
 初芝武美 (1998) 『日本エスペラント運動史』 日本エスペラント学会
 バハイ出版局編集部編 (1992) 『バハオラ 地球のビジョン』 マルジュ社
 比嘉春潮 (1971) 「エスペラントと弾圧下の言論」 『比嘉春潮 第4巻 評伝・自伝編』 沖縄タイムス社
 松村明編 (1988) 『大辞林』 三省堂
 柳田国男 (1933) 「郷土研究家としての佐々木喜善君」 『新岩手人』 第3巻第12号
 柳田国男 (1968) 「瑞西日記」 『定本柳田国男集 第3巻』 筑摩書房
 柳田国男 (1970) 「退読書歴」 『定本柳田国男集 第23巻』 筑摩書房
 柳田国男 (1970) 「郷土研究と郷土教育」 『定本柳田国男集 第24巻』 筑摩書房
 柳田国男 (1971) 「書簡」 『定本柳田国男集 別巻4』 筑摩書房
 柳田国男 (1971) 「年譜」 『定本柳田国男集 別巻5』 筑摩書房
 柳田国男 (1989) 『故郷七十年』 神戸新聞出版センター
 ヨコタ村上孝之 (2014) 『二葉亭四迷——くたばってしまえ——』 ミネルヴァ書房
 グスタフ・ヨン・ラムステット著 坂井玲子訳 (1987) 『フィンランド初代駐日公使滞日見聞録』 日本フィンランド協会
 Ian Rapley (2013) *Green Star Japan: Internationalism and Language in the Japanese Esperanto Movement, 1906-1944.*